



## わたしの研究 ③③

テーマ

### 前近代の 福祉史の問題点

山本 尚友



私が二年前まで専任研究員として在籍し、現在でも嘱託研究員として研究に参加している京都の世界人権問題研究センターの研究第

二部・同和問題の研究の前近代班では、現在共同研究のテーマに「前近代における救済の研究」が設定されている。研究テーマの議論では、「前近代における福祉の研究」とする案もあげられたが、日本では福祉は近代に導入された考えであり、「救済」の方が福祉をもふくみながら広く対象を設定できるということでこのテーマとなった。

同和問題が研究テーマの部会で「救済」をテーマとするということにも、当然異論があった。しかし現在、被差別部落の淵源は古代末期に成立した非人身分に求める見方が有力になっている。非人身分は大きくふたつの

集団からなっていて、ひとつは罪人であり、もうひとつは乞食であった。当時の乞食は、荘園の増大によって耕作地を失った貧困者だけでなく、律令体制下で一定の保護を受けていた重病者や身体障害者が、律令制の衰退の結果、属していた共同体から放逐された人びとが多くふくまれていた。

この非人身分の中から、穢れの清めを職掌とする集団が派生し、またこれらと同種とみなされた人びとも非人とされるなかで、被差別部落が形成されていくのである。つまり、まさに生成の瞬間において、被差別部落も救済の対象とされる社会的弱者の一部であり、その後も弱者とみなされつづけてきたのである。

ところで、被差別部落の研究は戦後とくに同和对策事業特別措置法が1969年より施行された影響で、1970年代頃より活発に取り組まれるようになり、現在ではかなりの研究蓄積を持つまでになっている。一方、社会福祉史はというと、福祉の本格的開始が近代ということが大きく影響してのものなのか、これまでの研究は近代に集中していて、前近代の研究はあまり進んでいないという現状にある。

あまりに研究の蓄積に差がありすぎるといふことは、これまで部落史研究にたずさわる

なかで、気になっていたことであった。例えば、古代中世の非人身分の中に多くその姿をみる癩者という存在があるが、彼らは近世には京都では「物吉村」、奈良では「北山十八戸」という居住地を形成していることが知られているのだから、乞食の集団から彼らが分化するのはいつ頃なのか、その契機は何なのか現在のところ一切分かっていない。

しかし、乞食の集団からの分化という点では、被差別部落のひとつである「宿(夙)」も同様の過程をたどっており、これとの関連から癩者の分化の過程はぜひとも明らかにしなければならない課題なのである。問題をさらに根源的に掘りさげると、部落史研究は福祉・救済の研究の一分支と考えることが至当であり、部落史研究が孤立して取り組まれていることそのものが、問われなければならないのである。

これまでの二年間は、先行研究を見直すことにほぼ費やされたが、それを通じてこれまでの救済史には大きな問題があることが分かった。それは、近代初頭に日本に社会福祉というものを持ちこんだのは基督教であり、仏教各派はそれとの対抗関係から福祉事業に乗り出していく。そして、前近代救済史研究もそれに影響されて、意図的に福祉の実

行者を仏者に求めていったという事情である。

もちろん、日本に救済という観念が定着するうえで、仏教が果たした大きな役割を否定しようとするものではない。また、古代・中世に貧者救済に献身した僧侶が多くいることもまた確かである。だが、日本の福祉を考えるうえで問われなければならないのは、近代の基督教解禁以前、日本には福祉らしい福祉がなかったことではないだろうか。なぜ、救済にあたった僧侶たちの活動が継続されず、制度化されることもなかったのか、それこそが研究の中核とならなければならないと考えるのである。

(社会福祉学部教授・前近代被差別部落史)

